アルテス　リベラレス　（岩手大学人文社会科学部紀要）
第一〇二号　二〇一八年六月　二五頁～四七頁

佐藤一斎年譜稿

中村安宏

凡例

一、佐藤一斎の年譜として現在のところもっとも備わっているのは、田中佩刀氏の「佐藤一斎年譜」（『佐藤一斎全集』第九巻所収、明徳出版社、二〇〇二年）である。本稿は、氏の年譜から要項を抜き出して、そこに漏れている著述などを補い、一斎の文詩集『愛日楼全集』（東京都立中央図書館河田文庫所蔵本を使用、近世儒家文集集成第一六巻〈ぺりかん社、一九九九年〉所収）とその諸稿本（河田文庫および同図書館の特別買上文庫所蔵の『寛政未定稿』『陳荘窩詩鈔　一斎甲稿鈔』『享和始存稿』『一斎居士甲子稿』『一斎居士稿』『愛日楼稿本』〈三種〉）を分析して、氏の年譜を補正することに主として努めた。

一、一斎に関する事項は○、参考事項は□で示した。

一、『愛日楼全集』については愛全と略記して巻数を付記した（たとえば『愛日楼全集』巻二二は、愛全二二と略記）。

一、著述・講義録・選出本・校定本・刊行本・手写本の所蔵場所は、そこにのみあるものにかぎり記した。

一、門人の入門時などについては、高瀬代次郎『佐藤一斎と其門人』（南陽堂、一九二二年）に挙げられている主な門人（聴講者も含む）について、笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究上・下』（吉川弘文館、一九六九年・一九七〇年）などを参考にした。

一、一斎の書簡が各地に残っている。今後の調査を期したい。

安永元年（十一月十六日改元）　一七七二　壬辰　一歳

□正月、田沼意次（一七一九～八八）が老中となる。

○十月二十日、江戸浜町の岩村藩の藩邸で生れる。父は同藩家老佐藤信由（一七二八～一八一四、字は壹卿、通称勘平、号は文永）、母は下総関宿藩の家老蒔田正清の娘留（一七四〇～一八一六）である。二人の間にはすでに一男二女があったが、長男の鷹之助は一斎が生れる以前に夭折していた。信由は、同僚であった小菅勝咸の第三子信久（一七五四～九六、字は敬之、通称治助）に長女の千恵を嫁がせて彼を嗣子と決めていた。そのため一斎をこの信久の義子とした。信久は寛政七年七月に信由が致仕したのを承けて家老職を継ぐが、翌年の八月に病死してしまう。その後を信久の長男信義が継ぐことになる。「献懐府君墓誌」（愛全二二）によるに、信久は家老職を一斎に伝えるつもりであったが、一斎は「世故」にかかわって後を承けることができなかったという。この「世故」については寛政三年八月の項参照。

安永七年　一七七八　戊戌　七歳

○この年、三井親和（一七〇〇～八二）のもとで書道を習う。この年に一斎が書いた書が東京国立博物館に残る。一幅は隷書で「福寿」と書かれたもの。「文孝七歳」の落款がある。もう一幅は篆書で「百福寿」と書かれたもの。「戊戌臘月吉旦文孝七歳書」の落款がある。少年期には「文孝」を使っていたことがわかる。十二、三歳のころにはすでに成人並みの文字を書いたという。少年時代にはほかに北条流兵学・小笠原流礼学を学び、また藩医和田圭言に字を

学んでいる。

天明元年（四月二日改元）一七八一　辛丑　十歳

□この年、岩村藩主松平乗薀（一七一六～八三）が隠居し、養子乗保（一七四九～一八二六、福知山藩主朽木玄綱の子）が後を継いだ。

天明六年　一七八六　丙午　十五歳

□八月、老中田沼意次が失脚する。

□九月、将軍徳川家治（一七三七～八六）が没する。

○この年か前年より宋学に従う。拙稿「佐藤一斎の思想―寛政期をめぐって―」（『日本思想史学』第二〇号、一九八八年）参照。

天明七年　一七八七　丁未　十六歳

□四月、徳川家斉（一七七三～一八四一）が将軍となる。

□六月、松平定信（一七五八～一八二九）が老中首座となる。

天明八年　一七八八　戊申　十七歳

□正月、柴野栗山（一七三六～一八〇七）が幕府儒者となる。

寛政元年（正月二十五日改元）　一七八九　己酉　十八歳

□九月、岡田寒泉（一七四〇～一八一六）が幕府儒者となる。

○十一月二十三日、『古文孝経解意補義』自序。この著作は東京都立中央図書館の河田文庫に二本ある。一本は「古文孝経解意補義」と題する自筆稿本、もう一本は「孝経解意補義」と題し、前者を清書したものである。寛政元年十一月二十三日付けの自序、および松平衡（林述斎、一七六八～一八四一）の翌年三月の後題がある。この著作は明の孫本の『孝経解意』に一斎が「補義」を加えたものであり、『孝経』の原文を分節して掲げ、つぎに『孝経解意』、つぎに「補云」として「補義」が記されている。そして付録に孫本の『古文孝経説』が載せられている。[1] 一斎の自序にはつぎの語が見える。「予嘗窃注二二三所一レ見、而蔵二諸篋中一。……間忽得二孫本解意一読レ之、殆与二鄙衷一相符。……往日之解探二諸篋中一、而参レ之較レ之、於二彼所一レ言、我削レ之、彼所レ未レ発、我闡レ之、命曰二解意補義一」。一斎自身が『孝経』について所見を注したものがまずあり、のちに孫本の著作に出会い、孫本が言っている部分は自分の見解を削り、孫本が言っていない部分は自分の見解を加えた。ということは「補義」の部分に一斎の見解が示されているだけではなく、孫本の「解意」の部分も一斎の見解と符合するものであることがわかる。

寛政二年　一七九〇　庚戌　十九歳

□五月二十四日、いわゆる寛政異学の禁が発令される。

○冬、『石経大学攷』自題。河田文庫所蔵（自筆本）。

○十一月一日、『論語互弁』自序。同年十二月佐藤惟孝識、同年十二月十六日杉本良敬識。静嘉堂文庫所蔵。なお『菱園闢蕪』（第十一則・第十四則）中にその書名が見える。

○この年、岩村藩主松平乗保の近侍となる。岩村町歴史資料館所蔵の『岩邑藩士歴世略譜』[2]には、取次上座・玄関番と見えている。

○この年、松平衡（林述斎）とともに井上四明や鷹見星皐の門に出入りする。井上四明（一七三〇～一八一九、井上蘭台の門下）との関係を伝えるものとして、一斎が寛政期に著した『心得録』のために四明が書いた「題心得録」（ともに愛全一）が残る。また「賀四明翁八十」（文化六年、愛全五〇）の詩がある。[3] 鷹見星皐（一七五〇～一八一一、徂徠門下の鷹見爽鳩の孫）との関係として、一斎はみずから所蔵していた『四庫全書簡明目録』の公刊を星皐か

ら要請されたことがある。承諾した一斎は星皐の校定作業に協力している（享和二年刊行、「刻四庫全書簡明目録序」愛全五）。『四庫全書簡明目録』は清の于敏中らが編纂したもので『四庫全書』中の各書の解題を簡明に述べたものである。また詩のやり取りもしており、「星皐先生墓碣銘」（文化九年、愛全一八）を作っている。[4]

○この年、友人杉本樗園（一七七〇～一八三六、名は良・良敬、字は子敬、通称は仲温、のちの幕府医官）とともに蛮行を悔悟し、天下第一等の事を為さんと志す。天明六年の項記載の拙稿参照。

寛政三年　一七九一　辛亥　二十歳

○二月、『蘐園闢蕪』成る。一斎は徂徠学批判の書『蘐園闢蕪』（内題。外題は「弁道闢蕪」。自筆本）を著しているが、それを嗣子立軒（一八二二～八五）が弘化三年に手写整理したものが『弁道薙蕪』である。二本とも河田文庫所蔵。『蘐園闢蕪』には巻末に総括が付されているが、『弁道薙蕪』ではそれを削って、代わりに立軒の跋を付している。その総括中には「寛政辛亥春二月」の語が見える。なお『弁道薙蕪』は『佐藤一斎全集』第一巻（明徳出版社、一九九〇年）に収められている。

○二月から翌寛政四年六月の間、王陽明に対して関心を抱き、陸象山にも引かれ、陸王学を取り入れていく。天明六年の項記載の拙稿参照。

○八月、故あって職を免ぜられ、十月に仕籍を脱することを許される。一斎が懐徳堂で中井竹山に学んで帰る折り、竹山から贈られた語が「困而後寤、仆而復興」であったことを考えると、免職と寛政四年二月の遊学とは一連の事件であって、一斎の挫折感は長く尾を引いていたと推察できる。この間の事情について林述斎は「不レ図坐レ事解レ職」（「愛日楼文詩叙」）[5]と証言している。さきの『岩邑藩士歴世略譜』には「不埒之れあり。治助より相い願い、永の御暇」とある。治助は佐藤信久のこと。岩村藩で何があったのか。田中氏も年譜中に引いているが、ある日墨田川で同藩の友人と舟遊びをしていたところ、友人が誤って川に落ち溺死したので一斎は藩には帰れなくなり、そのまま江戸を出奔して大坂に向かったという逸話が残る（『佐藤一斎と其門人』二九頁所収）。しかし「そのまま出奔」というのでは一連の経緯に合わない。逸話の潤色を考えれば、実際このような事件があってその結果免職されたということであろうか。寺石正路『南学史』（冨山房、一九三四年）には、晩年の一斎に師事した西村尚軒の談話として、「翁の若年の事を聞きしに、二十歳の頃墨田川に舟遊す。折柄三浦御崎より将軍家献上の鰹船押切り櫓にて入り来る。咄嗟の間避くる遑なく船衝突し、此方の乗船沈没し、之が為め同船の女子溺死し、遂に累を受け近侍を免ぜられたりと」（八六七頁）という話を紹介している。尚軒が直接一斎から聞いたのだとしたら、やはりこの事件が免職の原因だという可能性が高い。『佐藤一斎全集』第一四巻（明徳出版社、二〇〇三年）の池上博之氏の解説では、舟が転覆し同僚が行方不明になったという。また寛政三年は宋学から陽明学へと関心が移る時期に当たる。あるいはいわゆる寛政異学の禁も関係していたのであろうか。なお安永元年の項の「世故」とは、この免職一件のことではないかと考えられる。また寛政四年の項の捨蔵への改称は、岩村藩免職にかかわっての疎外感を示していると考える。

□九月、尾藤二洲（一七四五～一八一三）が幕府儒者となる。

□この年、佐賀から古賀精里（一七五〇～一八一七）が出てきて幕命により昌平黌で経典を講じている。

寛政四年　一七九二　壬子　二十一歳

○二月、衡の勧めで大坂に遊学し、暦学者間大業の家に宿泊して懐徳堂の中井竹山（一七三〇～一八〇四）に師事する。ここで竹山の

子の曽弘（一七六七～一八〇三、字は伯毅、号は蕉園）やのちの新見藩儒の丸川松隠（一七五八～一八三一）などの友人を得る。京都の皆川淇園（一七三四～一八〇七）を訪問している。同年六月に帰る。その折りに竹山から「困而後寤、仆而復興」の語を贈られる。遊学の折りの竹山との関係について『言志晩録』別存（第四四条）には、日夜竹山の傍らにいて夜半まで「討二論経義一」したことが記されているが、「左伝雕題略叙」（弘化三年、愛全九）にはより詳しく、一斎が経典についての「鄙見」を示すと、竹山は「可否」を述べて「折中」したこと、また竹山と弟履軒（一七三二～一八一七）とは「持論」に異なるところがあったが、一斎は履軒とも徹底的に「討論」したこと、一斎は履軒の『春秋左伝雕題略』を一部写してもち帰り、つねに生徒に示していたことが記されている。また一斎門下の林鶴梁（一八〇六～七八）の「作文秘訣」（林圭次編、芳村正秉校『鶴梁文鈔続編』一八八一年刊）には、竹山はつねに『春秋左氏伝』や『唐宋八家文』などの暗唱を一斎に課していたことが記されている。これまで一斎は懐徳堂にて竹山に師事したと言われてきたが、これからは履軒との関係も考えねばなるまい。

○この年の大坂遊学の折りの紀行詩『西遊詩草』一巻があったようである。「西遊漫草序」（愛全四）参照。ただしこの名でのまとまった詩集は存否不明。

○八月、『啓蒙図攷』自序。河田文庫所蔵。

○この年、初名の信行を坦（たいら）、通称の幾久蔵を捨蔵と改める。字は大道である。そのほか公道（井上四明「題心得録」愛全一・林述斎「送公道西游」『佐藤一斎と其門人』所収）が使われている。

寛政五年　一七九三　癸丑　二十二歳

○二月二日、林錦峰（一七六七～九三、名は信敬）に入門し、その邸内に寓居する。四月二十日に錦峰が没し、七月に元岩村藩主松平乗薀の第三子衡（たいら）が後を継ぎ、十二月に大学頭林述斎となる。一斎はそのまま述斎の門人となった。林家の門人帳『升堂記[6]』には、中嶋左仲なる人物（不詳）の紹介で入門したことが記されている。

○四月五日、袁燮（えんしょう）（宋、陸象山門下）『絜斎毛詩経筵講義』手写了。巻末に「題毛詩講義後」が付されており、その末尾に「寛政癸丑四月端午　惟一斎　手識」の語が見える。「題絜斎毛詩経筵講義後」（愛全二六）参照。河田文庫所蔵。

□七月、松平定信が老中を罷免される。

○十二月六日、『心得録』井上四明題。これは全八十条の箴言集・随想録でのちの「言志四録」につながる性格の著作である。『寛政未定稿』巻四所収、のち愛全一に収録。なお田中佩刀氏が嘉永六年のものとしているのは誤りである。

○この年、骨董家が王陽明の書軸を売りに来たことがあった。内容は蘇東坡の「墨妙亭詩」である。高価なため一斎には買うことができず、中村景蓮なる人物の手に入ってしまった。結局文政年間に一斎の手に渡ることになる（「王文成公真蹟跋」愛全一九）。

○『愛日楼手抄』手写。内容は、蔡淵（宋）『易象意言』・張淏（宋）『雲谷雑記』・朱国祚（明）編『湧幢小品』・張栻（宋）『南軒文集』・田芸蘅（明）『香宇外集』・『櫟翁稗説』・黄瑾龔『楊復所先生家蔵文集抄』。河田文庫所蔵。

○この年のころから、松崎慊堂（一七七一～一八四四）、清水赤城（一七六六～一八四八）、市野隼卿らと交際している。

寛政六年　一七九四　甲寅　二十三歳

○四月、仁正寺藩主市橋長昭の帰藩を送り、逆境下の状況を述懐している（「送仁正侯還藩序」愛全四）。

□十二月、幕府儒者岡田寒泉が転職する。

寛政七年　一七九五　乙卯　二十四歳

○一月、『発音発』を著す。

□七月、父信由が致仕して義兄の信久が家老職を継ぐ。

○この年以降に『大学一家私言』を著している。

寛政八年　一七九六　丙辰　二十五歳

○二月、致仕した父信由と畿内に遊び、大和、伊勢、摂津、播磨の名勝を探訪した。その折りの紀行文詩『西遊漫草』があったようである。「西遊漫草序」（愛全四）参照。ただしこの名でのまとまった詩集は存否不明。

□五月、古賀精里が幕府儒者となる。

○六月、本所の東江寺で何年かぶりで山本北山（一七五二～一八一二）と再会した。北山とは大坂遊学以前に一度会っている。二人が親しく付き合うようになるのはこの再会以後である。北山は古文辞学派（徂徠学派）の詩作を批判した性霊派の旗手、またいわゆる寛政異学の禁に反抗した五鬼の一人として知られている。一斎は北山の依頼で随筆『孝経楼漫録』の序文を書き、正学派朱子学者を批判している（「孝経楼漫録序」愛全四）。のちになって文化年間には詩論『孝経楼詩話』に序文を書いている（「孝経楼詩話叙」愛全六）。

□八月十六日、佐藤信久が没する。信久の長男信義（生没年不詳）が後を継ぐことになる。

寛政九年　一七九七　丁巳　二十六歳

□十月、幕府儒者柴野栗山が転職する。

○冬、幕臣片岡思温（名は包孝）の娘栞（一七七五～一八〇四、字は如蘭、号は香圃女史）と結婚した。二年後には長女が生まれ希楚（きそ）と名づけた。

寛政十一年　一七九九　己未　二十八歳

○九月以前[7]、『古本大学』書入。河田文庫所蔵（図書番号123KW50・123KW52）。

○九月、「塾規三条」（『俗簡焚余』所収）を定める。

寛政十二年　一八〇〇　庚申　二十九歳

○四月六日、平戸藩主松浦（まつら）静山（一七六〇～一八四一、在任一七七五～一八〇六）の招きで出発。長崎と平戸に赴く。平戸の藩校維新館で『大学』の講義をする。帰途大坂で皆川淇園に再会し、九月に帰って来る。静山は寛政の初年に江戸藩邸内の学館を落成させた折りにも一斎を招き開講させたことがある（『佐藤一斎と其門人』五六四頁参照）。また静山は、文化二年の夏に江戸に向かう途中で漢詩を何篇か作ってそれを『東行詩草』としたが、一斎はその添削を依頼されている（「東行詩草叙」愛全六）。天保六年、静山は山鹿素行の『聖教要録』を蔵板にしたいと林述斎に相談し、この著作を見せているが、述斎は自分の意向を一斎を通じて伝え、差し控えるのがよいと説いている（天保六年十二月十八日付け、静山宛て一斎書簡、東洋文庫『甲子夜話三篇2』〈平凡社、一九八二年〉巻二三[8]）。またこの旅行中、やはり長崎に遊学していた朝川善庵（一七八一～一八四九）と知り合いになっている（「古文孝経私記叙」愛全七）。

（寛政年間）

○寛政元年～五年の間、『九卦広義』成る。松平衡跋。衡が林家を継ぐ寛政五年までの寛政年間に書かれたものである。『寛政未定稿』巻二所収、のち愛全二に収録。

○宋学時代に「理学真偽論」（愛全一五）を著す。

○『伊川撃壌集』選出。門下生のため。これは北宋の邵康節の思想

詩集であり、性情正しい心から発して世のなかの悪弊を正す詩集として一斎みずから玩味していたものである。「選撃壤集序」（愛全五）参照。存否不明。

○『寛政未定稿』六巻四冊。第一冊ー目録・「跋九卦広義」（松平衡）・「題心得録」（井上四明）・巻一（文一九篇）・巻二（文一五篇）。第二冊ー目録・巻三（文二八篇）・巻四（「心得録」）。第三冊ー目録・巻五（文二六篇）。第四冊ー目録・巻六（詩一六二篇）。河田文庫所蔵。

○『陳荘窩詩鈔　一斎甲稿鈔』一冊。「陳荘窩詩鈔」（詩四二篇）。「一斎甲稿鈔」（文二一篇）。河田文庫所蔵。

○このころから近江仁正寺藩主市橋長昭（一七七三～一八一四、在任一七八五～一八〇四）と親しく、一斎は長昭のために詩文を作ったり対読したりしている。[9]

○三谷慎斎（生没年不詳）が師事している。

享和元年（二月五日改元）　一八〇一　辛酉　三十歳

□九月二十九日、本居宣長（一七三〇～一八〇一）が没する。

享和二年　一八〇二　壬戌　三十一歳

○十月十五日、門人の斉藤文徳を連れて武州本牧（現在の横浜市中区）の錦屏海に遊び、『追蘇遊録』を作る。

○朱鶴齢（清）編『尚書埤伝』手写。河田文庫所蔵。

（享和年間）

○『享和始存稿』四冊。[10]第一冊ー辛酉（享和元年）巻上（文二〇篇）・巻下（詩五五篇）。第二冊ー壬戌（享和二年）巻上（文一五篇）・巻中（文一一篇）。第三冊ー壬戌巻下（詩九六篇・「追蘇遊録」）。第四冊ー癸亥（享和三年）巻上（文二〇篇）・巻下（詩八三篇）。河田文庫所蔵。

○六歳年下の幕臣でのちに『御実紀』の編纂を行うことになる成島司直（一七七八～一八六二、号は東岳）とはこのころより親しく、水月楼での詩会に加わり、生涯の付き合いをしていく。[11]

○市河寛斎の子で七歳年上の書家米庵（一七七九～一八五八、名は三亥、字は孔陽、号は米庵のほかに小山林堂など）とはこのころより親しい。米庵は昌平黌に入って林述斎、柴野栗山らに儒学を学んだ。文政四年以降、金沢藩の世子前田斉康の侍講となる。『愛日楼全集』に収録されている序文を見ると、ほかの依頼者に対しては一人あたり多くとも二篇書いているに過ぎないのに対し、米庵の依頼で書いた序文は全七十六篇中七篇ある。それも享和二年（一八〇二）から嘉永二年（一八四九）にまで及ぶ。[12]二人の交流はもっと注目されてよい。

○享和・文化年間に因幡若桜藩の前藩主池田定常（一七六七～一八三三、在位一七八五～一八〇一、号は冠山・天山など）の陶白堂や、[13]姫路藩主酒井忠道（一七七七～一八三七、在任一七九〇～一八一四）の藩邸に赴いて、[14]講義をしたり詩会に参加したりしている。

○このころから北条藩世子水野忠篤（一七八七～一八〇六、号は鑑海）と交流がある。[15]

文化元年（二月十一日改元）　一八〇四　甲子　三十三歳

○正月十五日から四月八日まで、八代洲河岸の林家邸宅の西隣に愛日楼を新築するため、佐藤信義の竜口の邸宅に寓居する。その間の日記が『僑居日記』として残る。

□二月、中井竹山が没する。

○八月十六日、妻栞を失う。一斎と栞の間には希楚、燕、鉉という三人の娘があった。希楚は聡明な娘であったが文化三年一月二十

日、当時はやっていた天然痘に感染して八歳で夭折してしまう。燕は弘前藩士の松前直一と結婚。鉉は昌谷碩（精渓）と結婚したが数か月後に病没してしまう。なおその後、坂本氏と結婚したがすぐに離婚している。この坂本氏との間には長男の滉（通称は慎左衛門）が生まれた。ところが滉は放蕩不羈で父の言うことを聞かず、佐藤信義の養子にしようとするも、家を飛び出して幕府徒士田口某の養子になってしまった。一斎は性善説は成り立たないのかとつねに嘆いていたという（楠本碩水『先師佐藤一斎先生遺事』〈『楠本端山・碩水全集』葦書房、一九八〇年〉所収・『岩邑藩士歴世略譜』）。

○『一斎居士甲子稿』三巻一冊。巻上（文一二篇）・巻中（詩三八篇）・巻下（「僑居日記」）。河田文庫所蔵。

○この年、江戸に来ていた菅茶山（一七四八～一八二七）の訪問を得ている。一斎は寛政十二年の長崎・平戸旅行の途中ではじめて茶山の存在を知った。江戸に帰って伊沢子琢からその詩集を見せてもらい詩に巧みなことを知る。面会の機会を得た一斎は、茶山が備後の茶山を描いた『春川釣魚詩画』の序文依頼に答えている（「春川釣魚詩画序」愛全六）[16]。

○この年のころ、大窪詩仏（一七六七～一八三七）の訪問を受けている。詩仏は寛政期に柏木如亭とともに二瘦詩社を結んで、心の性霊にもとづく清新な漢詩を鼓吹していたが、のち文化三年以降は神田お玉が池に詩聖堂を営み、江戸漢詩壇を指導していく。江戸の書肆、金蘭社の七家から于済（元）の『聯珠詩格』新刻の依頼を受けていた詩仏は、この書の校訂をするために一斎の蔵本を借りに来たのである（「刻聯珠詩格叙」愛全六、山本北山『孝経楼詩話』四二・同「新刻唐宋聯珠詩格序」）[17]。『聯珠詩格』とは唐宋の七言絶句を詩格に応じて分類したものである。一斎の蔵書は当時の文人にとっても魅力あるものであったようである。

○この年のころ、画家の谷文晁（一七六三～一八四〇）と頻繁に交流していた[18]。

文化二年　一八〇五　乙丑　三十四歳

○十一月[19]、林家塾の塾長となる。林家塾長とはどのような立場なのであろうか。昌平黌では、寛政九年十二月に林述斎の建議により聖堂と塾舎の出納を勘定奉行の管理下に移すこととなり、同十二年三月にはこれらの建物の修築が完成する。さらに同年四月には今後の教育方針が決定することになる。幕府の直営となった学問所はもっぱら旗本・御家人の子弟のための学校とされた。そこに問題を感じた林述斎・古賀精里・尾藤二洲が享和元年八月に建議をした結果、さらに藩士・浪人を収容するための書生寮が増築されることになった。このような過程を経て昌平坂学問所は整えられた（石川謙『日本学校史の研究』〈小学館、一九六〇年〉・和島芳男『昌平黌と藩学』〈至文堂、一九六二年〉・同『日本宋学史の研究』〈吉川弘文館、一九八八年〉参照）。ところで石川氏は、林家は昌平坂の塾舎のほかに八代洲河岸にも、いっそう私的な塾をもっていたことを明らかにしている[20]。つまり昌平坂の塾舎が収公されたあとでも、八代洲河岸の塾が学問所とは別組織というかたちで存続していたということになる。そのことと、愛日楼が八代洲河岸の林家の邸宅の西隣にあったこととを考え合わせれば、一斎はその八代洲河岸の林家塾（公私が分離されたのちの私塾）の塾長となったものと見てよかろう[21]。であるから、一斎が林家塾長になったことをもって、幕府とのかかわりが強くなったかのように見るのは当たらない。一斎はさっそく林家の門人帳『升堂記』の検索に便利なように、林単山（孔彰）に索引を作らせている（「題声類升堂記」文化二年、愛全二七）。一斎は天保十二年に幕府儒者となるまでこの任を務めていたようである[22]。その後は河田迪斎が継ぐことになる（「跋快烈公手簡後」愛全三四）。

文化三年　一八〇六　丙寅　三十五歳

○二月二十八日、林述斎に従って小金井に桜を見に行き『小金井観桜記』を作る。

○四月十二日、門人の三谷恂甫（慎斎）を連れて鎌倉に遊んで『相中遊記』（愛全三八）を作る。

文化四年　一八〇七　丁卯　三十六歳

○正月八日、三谷恂甫と平出済士とを連れて杉田村（現在の横浜市磯子区）に梅を見に行って『杉田村観梅記』を作る。

○二月、安積艮斎（一七九一～一八六〇）が入門する。文化十一年に神田駿河台に開塾し、天保十四年に二本松に帰藩している。

○四月十九日、高遠藩の徂徠学者中根君美（くんび）（名は経世、号は東平）の娘庸（一七七九～一八五二、号は梅閨）と結婚する。文化八年九月に次男其次が生まれたが、翌年の六月二十九日に夭折している。

□十二月、柴野栗山が没する。

文化五年　一八〇八　戊辰　三十七歳

○六月十六日、一斎は江戸に帰って来ていた市河寛斎（一七四九～一八二〇）の還暦祝賀会に出席した。寛斎は大学頭林鳳潭（ほうたん）に入門してのちには聖堂啓事役になったが、幕閣の政権交替にからんで天明七年に辞職する。このころ彼は江戸性霊派の拠点となった江湖詩社を興した。そののちも彼はしばしば昌平黌に赴いて講義をしていたが、いわゆる寛政異学の禁にからんで退き、富山藩主前田利幹（としよ）に仕えて藩校広徳館の教授となった。それ以降文化八年に致仕するまでの間、しばしば江戸と富山を往復している。寛斎は林述斎の邸宅にもよく訪れているのだが、述斎は寛斎を評してつぎのように言う。その詩ははじめ杜牧を学び、白居易、陸游と移って、結局のところ「陶冶鎔諸家」、別出二機軸一、亦非二一体一」、つまり諸家をつぎつぎに消化吸収して一家に拘泥しなかったと（「市河子静墓碣銘」『蕉窓文草』巻三）[23]。寛斎によれば、唐詩を好んだり宋詩を好んだり「好尚ハ人々異」なっているものなので、「己レヲ以テ人ヲ律」してはならないという（『談唐詩選』文化八年刊）[24]。一斎は「寿寛斎翁六十序」（愛全六）のなかで、現在の儒者が「一言不レ合詬罵、加二之強弁忿色一、不二肯屈下一」という状態なのに対し、寛斎は「与レ人交、不レ立二城府一」であったとして評価する。「城府」とは仕切りのこと。寛斎の詩論はその人柄と一体となっていたことを見ることができる。同時に一斎が寛斎に引かれていたものが何であったのかを知ることができる。

文化七年　一八一〇　庚午　三十九歳

○十二月上旬、『林氏略系』校了。末尾に「文化庚午嘉平月上浣坦校完」と見える。河田文庫所蔵。

○林述斎は、寛政十一年から文化七年にかけて中国で失われ日本に残っている著作を収集した『佚存叢書』を刊行している。この『佚存叢書』には、収録された著作のそれぞれについてそれを説明した跋文が付けられているが、中国ではすでに失われたことを書誌的に考証したほとんどの跋文は実は『愛日楼全集』にも収められている[25]。ということはつまり一斎の代作になるものなのである。それが叢書ではすべて述斎の名に替えられている。一斎が『佚存叢書』の編纂事業に深くかかわっていたことは明らかである。

文化八年　一八一一　辛未　四十歳

○閏二月、徳川家斉襲職の祝賀のための朝鮮通信使を接待するために、小笠原忠固（ただかた）（小倉藩主）と脇坂安董（やすただ）（竜野藩主）を首班とし、林述斎と古賀精里を副使とする一行が対馬に向かい、五月一日の午後に到着する。松崎慊堂が述斎の書記として随行している。江戸に

残っていた一斎は、述斎ら一行のその日その日の旅程を想像して『陟岵日録』を作っている。このとき一斎が随行しなかったのは老親が病気がちであったからだという。なお田中佩刀氏が、林述斎を首班とし、古賀精里を副とするとしているのは誤りである。

□十二月、幕府儒者尾藤二洲が退職する。

○この年、渡辺崋山（一七九七～一八六六）が入門する。

文化十年　一八一三　癸酉　四十二歳

○五月二十六日、『言志録』の執筆を開始する。文政六年（一八二三）十二月、福知山藩主朽木綱条（号は格斎）校字。翌七年二月下旬、朽木綱条跋。同年刊行。

□十二月十四日、尾藤二洲が没する。

文化十一年　一八一四　甲戌　四十三歳

○七月二十一日、父信由を失う。

文化十三年　一八一六　丙子　四十五歳

○十月十四日、母留を失う。

○この年、『哀敬編』を著す。

○この年以降に『論語欄外書』が成立している。無窮会平沼文庫の所蔵本が天保七年に手写されたものであり、天保七年以前には成立している。

文化十四年　一八一七　丁丑　四十六歳

○この年、朱熹『四書集註』の呉志忠（清）校定本の刊行を企画している。三月「呉氏校本四書集註序」（愛全七）参照。安政二年刊。

○四月十八日、昌谷精渓（一七九二～一八五八）が入門する。文政八年に望嶽楼に開講している。

□五月三日、幕府儒者古賀精里が没する。七月、子の侗庵（一七八八～一八四七）が幕府儒者となる。

（文化年間）

○『一斎居士稿』四冊。第一冊「一斎居士乙丑稿」（文化二年）｜目録・巻上（文一二篇）・巻下（詩五〇篇）。第二冊「一斎居士丙寅稿」（文化三年）｜目録・巻上（文一六篇）・巻下（詩三六篇）。第三冊「一斎居士丁卯稿」（文化四年）｜目録・巻上（文九篇）・巻下（詩二九篇）。第四冊「一斎居士戊辰稿」（文化五年）｜目録・巻上（文一八篇）・巻下（詩二二篇）。「一斎居士己巳稿」（文化六年）｜目録・詩（二五篇）・文（三篇）・詞（八篇）。東京都立中央図書館特別買上文庫所蔵。

○文化元年～十三年の間、[26]『課蒙背誦』がまとめられる。名数などの基礎知識の辞典である。河田文庫所蔵（図書番号013KW1・013KW2）。

○このころ、安中藩主板倉勝尚（？～一八二〇、在任一八〇五～二〇）ととくに親しい。江戸ではともに往来して経史を論評し、践履・事務の要所を商確し、また勝尚が別荘の庭園で心中の抱負を世に施せない鬱屈した思いを詩に吐き出した折り、一斎もそれに付き合った。さらに勝尚が国元に帰ったときにも書簡のやり取りをしていたという（「安中侯遺稿叙」愛全九）。

○このころから清末藩公子毛利元世（号は需堂）と交流がある。[27]元世については天保五年六月の項参照。

文政元年（四月二十二日改元）　一八一八　戊寅　四十七歳

○四月二十九日、岡永蘭洲（一七九八～一八六九）が入門する。

○九月十二日、日光に向かい、鹿島方面をめぐって十二月三日に帰宅。旅行記『日光山行記』を残す。日光へは輪王寺門跡の公猷（舜

仁）法親王に従って赴いたのである。なお一斎は輪王寺門跡では公澄・公猷・公紹とかかわりがあるが、とくに侍講を務めた公猷のためには何篇もの文を書いている。[28]

○文政初年、若山勿堂（一八〇二～六七）が入門する。

文政三年　一八二〇　庚辰　四十九歳

○この年、大島松洲（一七九三～一八三二）が入門する。文政五年ごろ仙台藩養賢堂講師となる。

文政四年　一八二一　辛巳　五十歳

○七月、江戸を出発。美濃上有知（現在の岐阜県美濃市）で先祖の遺跡と墓地を訪ね、また遺物を見せてもらう。そののち近江小川村（現在の滋賀県高島市安曇川町上小川）で藤樹書院に詣で、京都北郊で林羅山の祠堂である奉先堂を訪ね、また京都でも先祖の墓地を訪ねている。ここでは頼山陽らが送別の宴を催している。そののち大坂に向かい帰途に就く。途中岩村に立ち寄って九月に江戸に帰っている。一斎は京都で院伝奏であった日野資愛（一七八〇～一八四六、のちの武家伝奏）とはじめて面会している。以後資愛が公用で江戸に来た折りには一斎は面会して詩を呈している。[29]また頼山陽（一七八〇～一八三二）とは以後書簡のやり取りをしていく。尾張の村瀬石庵が『続唐宋八大家文読本』を編纂して一斎と山陽に序文を依頼したことがあった。一斎は文政八年に序を書いているが（「続八大家読本序」愛全八）、山陽のほうはこの草稿の添削を一斎に依頼している。[30]山陽は一斎の文章力に引かれていたようだ。

○九月二十四日、林述斎著『璋瓦庭訓』成る。一斎校。一斎自筆の朱書で「此冊快烈公所レ録、使二余訂覧一。余叨加二刪定一、因写二一通一存レ之、坦」と見える。河田文庫所蔵。

文政六年　一八二三　癸未　五十二歳

○九月、『白鹿洞書院掲示問』の刻成る。

文政七年　一八二四　甲申　五十三歳

○十一月五日、弘前藩主津軽寧親（一七六五～一八三三、在任一七九一～一八二五）から藩邸に招かれて講筵を開いている。これより毎月赴いて講義をしていく。[31]

○この年に『言志録』を刊行し、天保二年に藩校惇明館の館記執筆を依頼した福知山藩の朽木綱条（一八〇一～三六、藩主在任一八二〇～三六）は一斎に学んでいた。[32]

○この年から文政九年にかけての講義録『書経佐藤一斎先生説』が残る。武田信義録。慶応義塾大学附属図書館所蔵。

文政八年　一八二五　乙酉　五十四歳

○この年、朱錫旂（清）校定本『四書集註』刊。「刻四書集註叙」（愛全八）参照。

○この年以降に河田迪斎（一八〇六～五九）が入門している。天保四年（五年の説もある）六月に一斎の学問上の後継者となり、天保十二年に林家塾長となる。

文政九年　一八二六　丙戌　五十五歳

□六月二十六日、岩村藩主松平乗保が現職のまま没して、次男乗美（一七九二～一八四五）が藩主となる。

○九月十四日、沢村西陂（一八〇〇～五九）が入門する。天保三年に熊本に帰藩している。

○十一月、『岩村神主祭式調査書』を著す。

○この年、岩村藩の家老の列に加えられ十五人扶持を与えられる。のちにはさらに五人扶持を加増されている。ときに三十五歳であっ

た新藩主乗美はこれまで自分の教導役であった一斎を「為二老臣列一」した（『皇考故儒員佐藤府君行状』の語）。一斎は十月一日、藩主としての心掛けを記した「御心得向存意」を提出した。乗美のためにはほかに「菩提所取扱方」を成文化している。さらに家老に対して「重職心得箇条」を記してその心掛けを説いた。翌年には「丁亥建言」を書いて、家老の間に大赦の議論があったのを受けて、藩主の代替りのときに軽罪の者に限って赦すべき新令を設けるよう建言し、文政十二年には、藩士が怪しい占い師に惑わされないことを図って正月に出された「岩村異学之禁」の草案を起草している（以上、『佐藤一斎と其門人』参照）。これらはすべて一斎の書簡・文書集である『俗簡焚余』に収録されている。ところで『岩村町史』（一九六一年、二〇九頁）を見るに、乗美のときの家老に一斎の名はない。正式の登用なのではなく、家老同様の扱いを受けたということだと考える。なお同町史によるに、乗美の代になって藩財政はますます困窮を加えており、乗美は家老丹羽瀬生祐（字は好問、号は格庵、通称は清左衛門）を用いて藩政改革を行っていく。この生祐は一斎の門人である（「登天瀑山」愛全五二）。また一斎は世子乗喬（のりたか）の教育係も務めていたようだ（「癸卯孟秋初四日巖邑侯始就封賦此贈之」愛全五五）。

文政十年　一八二七　丁亥　五十六歳

○九月十日、『小学書欄外書』題。

○十一月二十九日、「王文成公三百年忌辰祭告文」（愛全三六）を作り、王陽明没後三百年を祭る。一斎が愛用していた和漢対照年表『和漢年契』が河田文庫に残っている。そこにはところどころに自筆の書き込みがなされているが、とくに中国明代の成化八年（一四七二）の箇所の「王文成公以二九月丁亥一生」、嘉靖七年（一五二八）の「戊子十一月二十九日辰時陽明王子卒」、日本の文政十年（一八二七）の「陽明卒后三百年」の語が目立つ。なお王陽明が生れたのは一斎が生れた（一七七一）三百年前に当たる。

○この年のころの松崎慊堂、依田半七、山角武太夫、佐藤一斎の書簡を集めた『手簡』が残る。河田文庫所蔵。

文政十一年　一八二八　戊子　五十七歳

○九月九日、『言志後録』に着手。天保八年（一八三七）成立。弘化三年（一八四六）刊行。

文政十二年　一八二九　己丑　五十八歳

○九月二十日、国分鶴村（かくそん）（一八〇四～九九）が入門する。

○九月、『愛日楼文詩』刊行。拙稿「『愛日楼文詩』の考察―ある一大名により結ばれた一斎像―」（『陽明学』第三号、二松学舎大学陽明学研究所刊、一九九一年）参照。

○十二月上旬、『大学摘説』（『大学欄外書』）自識。十二月末日、『大学古本旁釈補』自序。前後して『中庸欄外書』や『孟子欄外書』（翌天保元年に『孟子欄外書』の対校をしている）が成立。『中庸欄外書』は、岐阜県立図書館の所蔵本が天保七年に手写されたものであり、この年以前には成立している。なお無窮会織田文庫には文政五年五月に手写された『中庸説』が所蔵されている。欄外書というのは、これまで経典の欄外に書き込んできた、その欄外注の部分のみを整理したものであるが、この『中庸説』は『中庸欄外書』以前に整理されたものであり、注に多少の出入りがある。『孟子欄外書』は、岐阜県立図書館の所蔵本が文政十三（天保元）年に手写されたものであり、この年以前には成立している。

○この年に書かれた林述斎の「愛日楼文詩叙」によれば、今や一斎は学業は成就し有名になり、「王侯大人」が争って招待してしばしば民政・国是の諮問を受けるという状況であったという。

○この年、永山二水（一八〇二～四五）が入門する。

（文化～文政年間）

○『愛日楼稿本』四冊。第一冊（庚午・辛未・壬申。文化七年～九年）｜目録・文（二四篇）・詩（三八篇）。第二冊（丙子・丁丑・戊寅。文化十三年～文政元年）｜目録・文（三一篇）・詩（三七篇）。第三冊（辛巳・壬午。文政四年～五年）｜目録・文（三〇篇）・詩（三〇篇）。第四冊（癸未・甲申・乙酉・丙戌。文政六年～九年）｜目録・文（四一篇）・詩（四七篇）。河田文庫所蔵。

（文政年間）

○『愛日楼稿本』一冊（己卯・庚辰。文政二年～三年）｜目録・文（一八篇、「日光山行記」を含む）・詩（二一篇）。特別買上文庫所蔵。

○林鶴梁（一八〇六～七八）が入門する。

天保元年（十二月十日改元）　一八三〇　庚寅　五十九歳

○十二月二十六日、『伝習録欄外書』成る。

○この年、奥宮慥斎（一八一一～七七）が入門する。三年にして土佐に帰り、嘉永から安政の間に再び師事して安政六年一月に帰藩している。なお、『言志録』について嘉永のはじめに慥斎の質問に答えた「言志録初篇に就ての問目」（『佐藤一斎と其門人』所収）がある。

○この年、吉村秋陽（一七九七～一八六六）が入門する。天保二年七月に江戸を去り、以後何度か一斎のもとを訪れている。

天保二年　一八三一　辛卯　六十歳

○十月、福知山藩主朽木綱条の依頼に応じて『惇明館記』を書いている。[33]

○この年、飢饉の際の窮民対策として藩主みずからが米穀貯蔵を行うことを説いた『済厩略記』（『俗簡焚余』所収）を著す。

天保三年　一八三二　壬辰　六十一歳

○六月、『初学課業次第』を著す。

○六月下旬、高遠藩主内藤頼寧（一八〇〇～六二）の依頼に応じて『学問所創置心得書』を書いている。[34]

○この年、『付紳簿』成る。西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵。

天保四年　一八三三　癸巳　六十二歳

○正月上旬、『啓蒙図攷』を河田迪斎に改訂させて『易学啓蒙図考』を作り、中旬には『易学啓蒙欄外書』成立。

○（天保五年の説もある）六月、門人の河田興（字は猶興、通称八之助、号は迪斎）を第八女の紳（または縝、号は彤雲）に配して学問上の後継者とした。一斎と三人目の妻庸との間には男子二人、女子七人があった。二男に当たる其次・四女の辰・五女の清は夭折。六女の繁は幕府与力池田惟斅と結婚し、七女の績は出雲の藩士佐藤邦翼と結婚している。八女は紳である。九女の綎（号は竹露女史）は岩村藩の丹羽瀬生裕の長男生枢（通称は市左衛門）と結婚したが離婚。三男が榥（字は光、通称は新九郎、号は立軒）。末女（名は未詳）は夭折している。さて天保元年、嗣子榥が九歳でまだ幼かったため、述斎の勧めで門下の秀才を選んで塾長を継がせることにした。迪斎に注目していた一斎は述斎にその人物を見てもらっている。

○この年から天保六年にかけて、大塩中斎（一七九三～一八三七）と書簡の往来あり。相蘇一弘『大塩平八郎書簡の研究』（清文堂、二〇〇三年）参照。

○この年、佐久間象山（一八一一～六四）が入門する。天保六年に松代に帰藩している。なお、天保九年以降、『言志後録』稿本を象山に示して批評させた「一斎先生言志後録に付存念申述候案」（信濃教育会編『象山全集』巻三〈信濃毎日新聞社、一九三四年〉所収）がある。

天保五年　一八三四　庚午　六十三歳

○正月二十五日、山田方谷（一八〇五～七七）が入門する。天保七年末に備中松山に帰藩している。

○六月、『各心得之箇条』毛利元世識。末尾に「天保甲午季夏　元世識」とある。「元世」は長門清末藩主の毛利元世（一七九六～一八四五、在任一八一八～一八四五）のこと。しかし原稿用紙は一斎のもの（「愛日楼稿本」の印刷入）であり、一斎が代作したものである。河田文庫所蔵。なお『東京都立日比谷図書館蔵河田文庫目録』では天保十一年のものとしているが、これは甲午と庚子とを読み違えたためである。『国書総目録』も踏襲している。文化期ころより元世と親しく、「某侯代撰」「女中掟」（『俗簡焚余』所収）なども代作している。[35]

○九月ごろ、中島操存斎（一八二二～六八）が入門する。四年間従学している。

天保六年　一八三五　乙未　六十四歳

○正月、嶺田楓江（一八一七～八三）が入門する。天保八年十二月まで師事している。

○七月八日、木下犀潭（一八〇五～六七）が入門する。

○この年のころ、大橋訥庵（一八一六～六二）が入門する。天保十二年に独立して江戸に思誠塾を開く。

天保八年　一八三七　丁酉　六十六歳

□二月十九日、大塩平八郎の乱が起こる。

○三月六日、山田方谷宛て書簡（『山田方谷全集』第三冊〈明徳出版社、一九九六年〉所収）のなかで大塩の行動を批判している。

□四月、家斉が隠退し、九月二日、家慶（一七九三～一八五三）が将軍となる。

○水戸藩主徳川斉昭（一八〇〇～六〇、在任一八二九～四四）から『弘道館記』草稿の添削批評を依頼され、九月十八日、答申している。[36] 斉昭からは天保期に藩邸に招かれて講釈をしており、しばしば詩文の交流もしている。

天保九年　一八三八　戊戌　六十七歳

○正月、『言志晩録』執筆開始。嘉永二年（一八四九）二月成立。翌年九月刊行。

□十一月、大学頭林述斎は老病を理由に致仕し、十二月に第三子の煌（一七九三～四六、号は楳宇・培斎）が大学頭となり、また述斎の第六子煒（一八〇〇～五九、式部、号は復斎）が学問所御用掛として補佐している。

○この年から安政六年にかけての日記『腹暦』が残る。河田文庫所蔵。『佐藤一斎全集』第一三巻・第一四巻（明徳出版社、一九九八年・二〇〇三年）所収。

天保十年　一八三九　己亥　六十八歳

□五月十四日、渡辺崋山が逮捕される（蛮社の獄）。

○五月二十八日、横井小楠（一八〇九～六九）が一斎と対面し、それ以後講釈を聴いている。翌年に熊本に帰藩している。

○十二月十日、『近思録欄外書』成る。

天保十一年　一八四〇　庚子　六十九歳

○二月二日、『呉子副詮』成る。

○寛政十一年（一七九九）よりこの年までの書簡をまとめて『俗簡焚余』を作る。

○この年、朱熹『小学』校刊。

○この年から天保十二年にかけての口授録『一斎先生近思録講説』が残る。寧浦筆録。寧浦とは岡本寧浦（一七八九～一八四八、名は惟密、通称は退蔵）のことか。東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。

天保十二年　一八四一　辛丑　七十歳

○正月下旬、一斎が校定した『音訓五経』が刊行される（文化十年に刊行されたが版木が焼失してしまっていた）。

□将軍徳川家斉は天保八年に職を家慶に譲って江戸城西丸に隠退し、なおも大御所として幕政を左右していたが、この年の閏正月に没する。それを受けて水野忠邦（一七九四～一八五一）が五月から天保の改革を始めていく。

○四月、岩村藩の矢の倉下屋敷の土地数百歩を借り、書堂を新築して静修所と名づけ、二階には東曖楼を築く。楠本碩水の証言によれば、「静修」の額は王陽明の書から取って白字で板に彫ったものだという。また庭（続蕉園）には小さいほこらがあり藤原惺窩の肖像画を掲げて祭っていたという（『先師佐藤一斎先生遺事』）。

○七月十日、林述斎『封禅書』手写。河田文庫所蔵。

□七月十四日、林述斎が没する。

○十一月二十六日、幕府儒者となり、禄二百俵が与えられ、別に十五人扶持が与えられて昌平坂学問所の役宅に住むことになった。岩村町歴史資料館所蔵『福島文書』中の史料[37]によるに、一斎は十一月二十六日、躑躅（つつじ）の間において老中首座の水野忠邦から儒者として切米二百俵を給する旨が言い渡され、また新部屋において若年寄堀田正衡（まさひら）から書き付けを渡され、もとの依田源太左衛門の役宅へ引越して学問所教授を勤め、手当として十五人扶持を給し、その間の席順は大番の上とすることが伝えられている。一斎が登用されたときに林家以外で幕府儒者であったのは、筆頭古賀侗庵（一七八八～一八四七、在任一八一七～四七）、古賀精里門下の野村篁園（こうえん）（一七七五～一八四三、在任一八三二～四三、名は直温、通称は兵蔵）、述斎門下の杉原心斎（？～一八六八、在任一八四〇～六一、名は直養、通称は平助）である。なお他に移った依田源太左衛門は精里が推挙した儒者であった[38]。幕府儒者が行っていた職務としては、教育、試験[39]、釈奠、出版[40]、検閲[41]、外交、編纂などが挙げられる。

○十二月十一日、将軍徳川家慶に初見する。

天保十三年　一八四二　壬寅　七十一歳

○二月、八代洲河岸の旧宅を河田迪斎に与えて役宅に移る。昌平坂学問所構内は正門（御成御門）を背に東側に聖堂、西側に学問所があり、学問所の南には書生寮と役人長屋がある。一斎の役宅は役人長屋の西隣つまり構内の南西の片隅にある。聖堂の向こう側つまり構内で対極に位置する北東の片隅には古賀侗庵の役宅がある。このとき構内に役宅を与えられていた儒者はこの二人だけである[42]。一斎が役宅に移ったということは今までともに陽明学を講じていた弟子たちも学問所構内へやって来ることになる。なお楠本碩水の証言によれば、役宅外門の東に錫難軒があって多くの書籍を置いてあり、その額は佐賀藩主鍋島直正の筆になるものであったという。また役宅書斎、老吾軒の額は水戸藩主徳川斉昭の筆になるものであったという（『先師佐藤一斎先生遺事』）。

○四月、将軍家慶の前で『易』を講義する。

○六月下旬、『孫子副詮』成る。弘化三年に『呉子副詮』（天保十一

年成）と合わせて、『孫呉副詮』として刊行している。
○九月、『愛日楼文詩』四巻・『孫子副詮』一巻・『言志録』一巻・『言志後録』一巻を将軍に献本して銀七錠を与えられる。
□この年、岩村藩主乗美が隠居して、乗喬（一八二一～五五）が継ぐ。

天保十四年　一八四三　癸卯　七十二歳
○二月、邸地を本所に与えられる。弘化二年三月にはその邸宅を矢の倉旧楼の地に換えることを官に頼んで許されている。
○この年、金子得所（一八二三～六七）が入門する。弘化四年に上ノ山に帰藩している。

（天保年間）
○このころ、菊地五山（一七七六～一八五九）の詩歌会にときどき出席しているようである（「和歌題絶句叙」天保十年、愛全九）。
○このころ、松山藩の久松定通（一八〇四～三五、藩主在任一八〇九～三五）が一斎に学んでいる。[43]
○このころ、松山藩の久松勝善（一八一七～五六、藩主在任一八三五～五六）が一斎に学んでいる。[44]
○このころ、久留米藩の有馬頼永（一八二二～四六、藩主在任一八四四～四六）・有馬頼咸（一八二八～八一、藩主在任一八四六～七一）が一斎に学んでいる。[45]
○このころから佐賀藩の鍋島直正（一八一四～七一、藩主在任一八三〇～六一、号は閑叟）から藩邸に招かれて講釈し詩会にも参加している。[46]
○川路聖謨（一八〇一～六八）が入門する。
○四年以降、牧野黙庵（一七九五～一八四八）・牧野松村（一八二三～九一）が入門している。

弘化元年（十二月五日改元）　一八四四　甲辰　七十三歳
○十一月、林述斎の遺作の詩を校訂する。

弘化二年　一八四五　乙巳　七十四歳
□天保十四年閏九月に水野忠邦は罷免され、そののち一時は老中首座に復帰したが、この年の二月に辞職し、阿部正弘（一八一九～五七）が老中首座に就く。
○七月、オランダ国への書簡のことに関係した儒者の古賀侗庵・佐藤一斎、ともに時服を与えられる。[47]

弘化三年　一八四六　丙午　七十五歳
□十二月二日、大学頭林檉宇が没する。
○この年、『言志後録』刊。
○この年、名古屋藩の徳川慶藏（一八三六～四九、藩主在任一八四五～四九）が学んでいる。[48]

弘化四年　一八四七　丁未　七十六歳
□正月、林檉宇の子健（一八二八～五三、号は倜斎・壮軒）が大学頭となる。また同月三十日に古賀侗庵が没する。

（弘化年間）
○このころ、津和野藩の亀井茲監（一八二五～八五、藩主在任一八三九～七一）が学んでいる。[49]
○このころから宇和島藩の伊達宗城（一八一八～九二、藩主在任一八四四～五八）と交流している。[50]
○年間は不明だが、土佐藩の山内豊熙（一八一五～四八、藩主在任一八四三～四八）・豊信（一八二七～七二、藩主在任一八四八～五九、号は容堂）と交流している。[51]

嘉永元年（二月二十八日改元）　一八四八　戊申　七十七歳

○この年、中村敬宇（一八三二～九一）が入門する。

嘉永二年　一八四九　己酉　七十八歳

○閏四月十九日、老中・若年寄らが昌平坂学問所に臨み、海防・時務についての意見書の提出を諸儒に求める。一斎はこのとき和文の「海防策」と「時務策」（『佐藤一斎と其門人』所収）、および漢文の「海防策一道」（愛全一五）を提出している。

○（あるいは嘉永五年）五月下旬、『禿箒聚葩』を作る。題末に「己酉嘉永五年」とある。

嘉永三年　一八五〇　庚戌　七十九歳

○三月、将軍家慶が学問所に臨んで聴講した。一斎は同僚とともに朱熹の『白鹿洞書院掲示』を講義して物品を与えられる。

○九月、『言志晩録』刊。

○十一月二十九日、教授勤勉が賞されて切米百俵を加増される。

○この年、『一斎先生高麗本論語書入』（東北大学附属図書館狩野文庫所蔵）手写。この年以前には成立している。

嘉永四年　一八五一　辛亥　八十歳

○二月、楠本端山（一八二八～八三）が入門する。嘉永六年春に平戸に帰藩している。

○三月二十八日、池田草庵（一八一三～七八）がはじめて講釈を聴いている。同年四月十八日に江戸を発つ。

○五月、『言志耋録』自題。嘉永六年八月十六日、河田迪斎跋。安政元年二月刊行。拙稿「『言志耋録』の成立過程―幕府儒者・佐藤一斎の位置―」（『日本思想史研究』第二五号、一九九三年）参照。

○この年、『佐藤一斎日記』（大東急記念文庫所蔵）成る。自筆本。

○この年、吉村斐山（一八二二～八二）が入門する。嘉永五年に広島に帰藩している。

嘉永五年　一八五二　壬子　八十一歳

○正月二十九日、妻庸を失う。

嘉永六年　一八五三　癸丑　八十二歳

○六月三日、ペリーが浦賀に来航し、九日には浦賀奉行の井戸弘道・戸田氏栄らが久里浜で接見してフィルモア大統領の国書を受領する。この国書の和訳は広範囲から意見を徴するため七月に回覧されることになるが、これに先立って六月十五日、大学頭林僩斎、西丸留守居筒井政憲（一七七八～一八五九）・林復斎[52]、また佐藤一斎・古賀茶渓・安積艮斎[53]の六人が異国書翰和解用掛に任ぜられ、英文・漢文・蘭文の三通からなる国書のうち漢文の和訳を命ぜられた。そのため一斎は九月に銀二十錠を与えられる。

□六月二十二日、将軍家慶が没する。十月二十三日に家定（一八二四～五八）が将軍となる。また同年九月六日に大学頭林僩斎が没し、復斎が大学頭となる。

○七月二十一日、「存意書・返翰大意」提出。七月八日にアメリカ大統領国書の返書についての意見書を求められ、提出したもの。東京大学史料編纂所所蔵『大日本維新史料稿本』二四一所収。

○八月ころ、春日潜庵（一八一一～七八）が訪れている。

○十一月十一日、儒者杉原平助（心斎）・松崎満太郎[54]とともに布衣となる。

○十二月、儒者杉原平助・松崎満太郎・林図書助[55]・安積祐助（艮斎）とともに家定将軍宣下の賀文を献上したことによる時服を与えられる。

（嘉永年間）
○このころ、津藩の藤堂高猷（たかゆき）（一八一三～九五、藩主在任一八二五～六九）と交流している。[56]

安政元年（十一月二十七日改元）　一八五四　甲寅　八十三歳
○二月、『言志耋録』刊。
□三月三日、日米和親条約締結。
○七月ころ、東沢瀉（ひがしたくしゃ）（一八三二～九一）入門。同年冬に岩国帰藩。

安政二年　一八五五　乙卯　八十四歳
□十月、堀田正睦（一八一〇～六四）が老中首座となる。
○十二月、年老いても教授懇篤であることを理由に、黄金二錠・時服二領を与えられる。そのほか幕府に吉慶の事があったときに詩文を献上して時服を与えられたことが六回、職事勤勉が賞されて時服を与えられたことが一回、銀錠を与えられたことが四回あったという。
□十二月、河田迪斎が幕府儒者となる。
○この年、林図書助・古賀謹一郎（茶渓）・杉原平助らとともに奥講釈を勤める。

安政三年　一八五六　丙辰　八十五歳
□五月、嗣子立軒が幕府儒者見習いとなる。なお田中佩刀氏が幕府儒者となったとしているのは誤りである。幕府儒者となるのは一斎没後の安政六年十二月である。
○この年（あるいは寛政八年）、観奕道人『槐西雑志』手写。末尾に「丙辰仲夏十二月」の語が見える。河田文庫所蔵。

安政四年　一八五七　丁巳　八十六歳
□六月十七日、阿部正弘没す。
○八月、林図書・林民部（名は昇（のぼる）、号は学斎）・杉原平助・安積祐助・木村金平[57]とともに将軍家定の前で二回講釈をしている。

安政五年　一八五八　戊午　八十七歳
□四月二十三日、井伊直弼（一八一五～六〇）が大老に就任し、六月には堀田正睦が老中を罷免される。八月八日には将軍家定が没して十月二十五日に家茂（一八四六～六六）が将軍となる。
○五月ころ、倉田何庵（一八二七～一九一九）が入門する。
□六月十九日、日米通商修好条約調印。
□九月、安政の大獄が始まる。
○この年、楠本碩水（一八三二～一九一六）が入門する。

安政六年　一八五九　己未　八十八歳
□正月十七日、幕府儒者河田迪斎が没する。
□六月、横浜・長崎・箱館が開港されて、西洋諸国との自由貿易が始まる。
○天保九年からこの年にかけての日記『腹暦』が残る。河田文庫所蔵。『佐藤一斎全集』第一三巻・第一四巻（明徳出版社、一九九八年・二〇〇三年）所収。
○九月二十四日、昌平坂の役宅において没する。

（文政～安政年間）
○『愛日楼稿本』一〇冊。第一冊（丁亥・戊子・己丑・庚寅。文政一〇年～天保元年）丨目録・文（二〇篇）・詩（二二篇）。第二冊（辛卯・壬辰・癸巳・申午。天保二年～五年）丨目録・文（五二篇）・詩（三九篇）。第三冊（乙未・丙申。天保六年～七年）丨目録・文（一一篇）・詩（四〇篇）。（後巻）丨目録・文（一六篇）・詩（一九

篇）。第四冊（丁酉・戊戌・己亥。天保八年～十年）｜目録・文（三七篇）・詩（五四篇）。第五冊（庚子・辛丑・壬寅。天保十一年～十三年）｜目録・文（三七篇）・詩（三六篇）。第六冊（癸卯・甲辰・乙巳。天保十四年～弘化二年）｜目録・文（五四篇）・詩（五五篇）。第七冊（丙午・丁未・戊申。弘化三年～嘉永元年）｜目録・文（六一篇）・詩（四一篇）。第八冊（己酉・庚戌。嘉永二年～三年）｜目録・文（三九篇）・詩（一七篇）。第九冊（辛亥・壬子・癸丑。嘉永四年～六年）｜目録・文（三八篇）・詩（一七篇）。第十冊（癸丑・甲寅・乙卯・丙辰・丁巳・戊午。嘉永六年～安政五年）｜目録・文（二五篇）・詩（六篇）。河田文庫所蔵。

（安政年間）
○岡谷繁実（しげざね）（一八三五～一九一九）が入門する。

一斎の著述・書入・講義録・手写本のうち年が不明のものをここに掲げておく（五十音順）。

［著述］
○『愛日楼書目』。河田文庫所蔵。
○『愛日楼題賛撮録』。河田文庫所蔵。
○「意見書」。自筆。河田文庫所蔵。
○『御宛行渡方定』。河田文庫所蔵。
○『磕子時器雑記』。
○『賀表』。林復斎・一斎・安積艮斎など。東京大学史料編纂所所蔵。
○『近思録説』。岐阜県立図書館所蔵。
○『懸錘時器雑記』。
○『稿本』。河田文庫所蔵（図書番号121KW23）。
○『呉草廬定論』。自題のなかに「戊午之冬」の語が見える。つまり寛政十年か安政五年のもの。河田文庫所蔵。
○『左伝雑記』。国会図書館所蔵。
○『佐藤一斎書簡』。自筆。京都大学附属図書館所蔵。
○『自鳴鐘時刻考』。
○『周易図考』。
○『周易欄外書』。
○『尚書欄外書』。
○『聖堂漢文講義軌範』。一斎・安積艮斎著。東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。
○『白鹿洞書院掲示訳』。
○『名号録』。「愛日楼鈔本」の用紙を使用。河田文庫所蔵。
なお『国書総目録』に一斎のものとしてある『雅言』（東京大学附属図書館所蔵）は、村士玉水のものであり、同じく『経済随筆』（内閣文庫所蔵）は山田慥斎のものである。

［書入］（河田文庫所蔵）
○朱熹『易経本義』書入。寛政八年に大坂の河内屋喜兵衛により刊行されたものであり、書入はこの年以降のものである。
○林述斎『家園吟』書入。文化六年以降。
○葉采『近思録集解』書入。元禄七年に芳野屋権兵衛により刊行されたもの。
○朱熹『詩経集註』書入。江戸で刊行されたもの。
○『大学古本』（123KW51a）書入（大塩中斎関係）。拙稿「佐藤一斎の「公平之心」」（『日本思想史研究』第二三号、一九九一年）参照。
○『大学古本旁釈補』（123KW46）書入。本体の自序が文政十二年十二月末日に書かれたものであり、このときに本体が完成したとなると、書入はそれ以降のものである。書入のなかに「常並ノ講釈

ハ、得テ書物ノ伝来由来ナド説ケドモ、是ハ書籍辺ノコト故、今姑置キテ、肝要ノ処斗ヲ説ク也」と見えることから、これは講釈用のメモではないかと考えられる。拙稿「史料紹介・佐藤一斎の講釈用『大学』書入」（『日本思想史研究』第二一号、一九八九年）に翻刻紹介。

○朱熹『白鹿洞書院掲示』書入。江戸で刊行されたもの。

○三輪執斎『標註伝習録』（正徳二年序）書入。

○蘆屋山人『和漢年契』書入。寛政九年に大坂の葛城長兵衛により刊行されたものであり、書入はこの年以降のものである。

［講義録］

○『書経皐陶謨講義』。一斎講、岡本寧浦録。東北大学附属図書館狩野文庫所蔵。

［手写本］（河田文庫所蔵）

○『僑居雑抄』。内容は、『老学庵筆記』『格古要論』『解人頤』『書影』『説略』『池北偶談』『経義考』。

○紀昀など『四庫全書総目鈔』。

また門下生や嗣子の手になるものとしてつぎのものがある。

○『先考遺章』。西村尚軒編。安政七年二月、安積艮斎題。一斎の印譜。田中佩刀「『佐藤一斎印譜』の考察」（『明治大学教養論集』第二〇三号、一九八七年）参照。

○『愛日楼全集』。佐藤立軒編。河田文庫および同図書館の特別買上文庫所蔵の稿本（『寛政未定稿』『陳荘窩詩鈔　一斎甲稿鈔』『享和始存稿』『一斎居士甲子稿』『一斎居士稿』『愛日楼稿本』〈三種〉）などを整理したものである。

入門時が明らかでない主な門人として、鎌原桐山（一七七四～一八五二）、竹村悔斎（一七七八～一八一三）、丹羽瀬格庵（一七八九～一八三九）、氏家緑山（一七九七～一八四七）、菊地幽軒（一七九九～一八〇三）、田辺恕亭（一八一二～六二、天保九年に岩村へ行く）、長戸得斎（生没年不詳）、柳沢芝陵（一八一六～四五）、荒川秀山（生没年不詳）、松山隆阿弥（一七九五～?）などがいる。

注

（1）阿部隆一・大沼晴暉「江戸時代刊行成立孝経類簡明目録」（『斯道文庫論集』第一四輯、一九七七年）参照。

（2）横山寛吾『幕末の儒学者ー美濃の文人たち』（大衆書房、一九八二年）所収。

（3）『僑居日記』（文化元年）四月二日条にその名が見える。

（4）『僑居日記』二月四日条・二月六日条・二月十六日条・二月十九日条・二月二十三日条・二月二十四日条・三月十八日条・三月二十七日条・四月二日条・四月四日条にその名が見える。

（5）『縮刷版・愛日楼文詩（全）』（文化書房博文社、一九七七年）、『佐藤一斎全集』第二巻（明徳出版社、一九九一年）所収。

（6）河田文庫所蔵。また小川武彦・金井康編『徳川幕府蔵書目』第十巻（ゆまに書房、一九八五年）所収。

（7）（123KW50）本を（A1）、（123KW52）本を（A2）とするに、（A1）は刊本に一斎の書入がある。刊本は「古本大学（新）序」「（古本）大学」「大学問」から成っており、それぞれに欄外注と傍注（「古本大学序」は挿注）が施されている。これらの内容は一斎の他の『大学』注釈書とは異なり、またほとんどが中国儒者からの引用である。巻末には「附考」として、朱彝尊の『経義考』からの書目の抜書きがある。これを弟子が整理したのが（A2）である。（A2）は本文も写本であり、本文末尾に「寛政十一年己未九月」の語が見える。ここで執筆順序に関して、①（A2）本文→（A1）注→（A2）注、②（A1）注→（A2）本文

↓（A2）注という二つの場合が考えられる。（A1）刊本の「大学問」題言は「吾師接二初見之士一」から始まっているが、一斎はそこに「徳洪曰」を補い、「坦按、吾師上当レ補二徳洪曰三字一」と傍注を加えている。これに対して（A2）本文（写本）には、「徳洪曰」が補われている。（A2）本文が（A1）注の影響下に書かれたとすれば、②が正しいことになる。（A1）注は寛政十一年九月以前に施され、この年に弟子がそれを整理して（A2）を作った可能性が強い。

（8）『僑居日記』正月二十日条・正月二十五日条・二月五日条・二月十日条・二月十五日条・二月二十五日条・三月五日条・三月十日条・三月十五日条・三月二十日条・三月二十五日条・三月三十日条に平戸藩邸に赴いた記事が見える。つまり五の日と十の日の日課であった。ここで一斎は世子の侍講を勤め、また『尚書』の講義をしている。四月三日条には世子字説の代作の記事が見える。『愛日楼全集』のなかで静山との関係を示す文としては、ほかに「平戸侯世子字説」（文化元年、愛全一六）・「書神祖御書文後」（文化二年、愛全二七）・「三心亭説」（文化八年、愛全一六）・「泥写阿弥陀経跋」（愛全二八）・「贈松浦乃侯序」（文化十年、愛全七）・「記慈眼院龕背」（文化十年、愛全一二）・「養修禅尼碑陰記」（文化十二年三月、愛全二三）・「題心猿意馬図」（文政二年、愛全二九）・「平戸老侯貺明神宗諭文記」（天保九年、愛全一三）・「題地蔵像背」（愛全二九）・「静山老侯七旬小照」（愛全三九）・「静山老侯小照賛」（愛全三九）・「世襲平戸城主静山松浦公伝」（天保十三年、愛全二五）・「静山公像賛」（愛全三九）・「書第三巻末」（愛全三四）がある。詩では「静山老侯八十寿詩」（天保十年、愛全五四）がある。

（9）『僑居日記』正月二十二日条・二月十二日条・三月七日条・三月十二日条に黄雪園に赴いた記事が見える。そこで一斎は長昭と『新五代史』を対読している。また二月四日条・二月六日条・二月十六日条・二月十九日条・二月二十三日条・三月十七日条には長昭からの書簡が届いた記事が見える。そのほか二月二十四日条・三月二十七日条・四月四日条に長昭関連の記事がある。『愛日楼全集』のなかで長昭との関係を示す文としては、「黄雪園記」（愛全一〇）・「送仁正侯還藩序」（寛政六年四月、愛全四）・「占風亭記」（愛全一一）・「格斎説」（愛全一六）・「皥斎存稿序」（享和三年、愛全六）・「故伊豆守仁正寺侯夫人松浦氏碑銘」（享和二年、愛全一八）・「無量寿龕記」（享和三年七月、愛全一二）・「桜花続譜跋」（文化元年二月、愛全二七）・「寄蔵　文廟宋元刻書跋」（文化四年、愛全二八）・「皥斎存稿跋」（愛全二八）・「故下総守市橋公墓誌」（文化十一年、愛全二二）がある。

（10）『僑居日記』二月十二日条には「過二書賈長谷川一、属二享和始存稿釘装一」、三月十日条には「瀧川生見レ返二享和始存稿一」の記事が見える。

（11）『愛日楼全集』のなかで成島司直との関係を示す文としては、「跋浅草八勝図後」（享和元年、愛全二七）・「水月楼記」（享和二年、愛全一一）・「書熱海紀行後」（享和三年、愛全二七）・「題東岳公所蔵清商集書詩巻」（文化三年、愛全二八）・「杉田遊記跋」（文化九年三月、愛全二八）・「晃山扈従雑詩叙」（弘化二年、愛全九）がある。また『僑居日記』二月十八日条・二月二十一日条・二月二十六日条・三月十三日条・三月十九日条にその名が見える。『俗簡焚余』には「答成島邦之助君」が収められている。

（12）「筆譜序」（享和二年、愛全五）・「河孔陽西征詩序」（文化二年七月、愛全六）・「墨談序」（文化九年、愛全七）・「三家書論序」（文化十三年七月下旬、愛全七）・「墨場必携叙」（天保七年、愛全九）・「小山林堂文房図録叙」（弘化四年、愛全九）・「米庵百古叙」（嘉永二年、愛全九）。なお送序としては「別河孔陽序」（享和三年七月、愛全六）がある。

（13）『僑居日記』正月十七日条・正月二十七日条・二月七日条・二月二十七日条・三月十七日条・三月二十七日条、つまり七の日に陶白堂に赴いた記事が見える。そこで一斎は定常と『論語』を対読し、また詩会に出席している。また三月十一日条・四月六日条には定常からの書簡が届いた記事が見える。さらに正月十五日条を見ると、一斎が、愛日楼を建てるために佐藤信義宅に寓居した折り、定常が引っ越しの便宜を図っている様子がうかがわれ、生活面でも関係していたことがわかる。定常は後年『愛日楼文詩』刊行（文政十二年）の中心となった。『愛日楼全集』のなかで定常との関係を示す文としては、「答慎斎公」（愛全三五）・「慎斎説」（愛全一六）・「得月亭記」（享和元年、愛全一一）・「陶白堂記」（享和二年、愛全一一）・「皥斎存稿序」（享和三年、愛全六）・「天山公菊洞賦」（享和三年、愛全三七）・「天山老侯第八女碑陰記」（文化四年七月、愛全二三）・「皥斎存稿跋」（愛全二八）・「跋楽園詩後」（文化十二年、愛全二八）・「跋玉露公女哀詞巻後」（文政八年、愛全二九）・「故松平縫殿頭諱定常墓誌」（天保四年、愛全二二）・「故縫殿頭入道冠山源公墓碑銘」（天保四年、愛全一九）がある。この墓碑銘によるに、一斎と定常とは述斎の仲介で交友を結んだようだ。なお小谷恵造『池田冠山伝』（三樹書房、一九九〇年）参照。

（14）『僑居日記』正月二十一日条・二月十一日条・二月二十一日条・三月十一

日条、つまり一の日に姫路藩邸に赴いた記事が見える。そこで一斎は講義をし、また世子の質問に答えている。『愛日楼全集』のなかで忠道との関係を示す文としては、「呈姫路侯」（文化三年、愛全三五）がある。

（15）『僑居日記』正月二十一日条・二月四日条・二月十一日条・二月二十一日条・三月十一日条・三月二十一日条には、藩邸に赴いて、忠篤のために『尚書』を講じた記事が見える。『愛日楼全集』のなかで忠篤との関係を示す文としては、「題牧馬図」（享和三年、愛全二七）・「印匣銘」（文化四年、愛全三九）・「故周防守水野君墓誌銘」（文化十三年、愛全一八）がある。

（16）『僑居日記』二月六日条には、京都まで来ていた茶山が、そこにいた伊沢子琢の書簡に託してこの詩画の序を依頼してきたことが記されている。また富士川英郎『菅茶山　上』（福武書店、一九九〇年）五二四～五二五頁参照。なおその後の両者の交際については、同書下一九二～一九三、二二〇、二四六、二六〇、二六五頁参照。

（17）『日本詩話叢書』第二巻（鳳出版、一九七二年）所収。

（18）『僑居日記』正月十九日条・二月五日条にその名が見える。また河村元善編（谷文晁画）の『名山図譜』への序文「名山図叙」（文化元年、愛全六）は、谷文晁の仲介依頼により書いたものである。

（19）十月というのは、『皇考故儒員佐藤府君行状』によるものだが、文化二年にみずから書いた「題声類升堂記」（愛全二七）には「余以二文化乙丑十一月一承二乏都知一」とある。

（20）『日本学校史の研究』一八九・二三六頁。

（21）「初余之寓二於楊州一也、摂二其私塾一都講」（「跋快烈公手簡後」愛全三四）参照。また林家塾長期の一斎に入門した森正名の「聞見小録」（寺石正路『南学史』所収、八五九頁）には、一斎について「八代洲河岸林大学頭長屋に居る林家の都講と称す」と記されている。

（22）「大学頭培斎林先生嬪貞静夫人赤松氏墓誌」（愛全二二）と「貞静夫人碑陰記」（愛全二四、ともに天保十年、『愛日楼稿本』所収）には、末尾に「家塾長佐藤坦」の語が見える。ただし『愛日楼全集』では削られている。

（23）『崇文叢書』第一輯之七（崇文院、一九二六年）所収。

（24）『日本詩話叢書』第二巻（鳳出版、一九七二年）所収。

（25）「題古文孝経孔伝後」「題五行大義後」「題臣軌後」「題楽書要録後」「題両京新記後」「李嶠百詠跋」（以上、愛全二六）、「書文館詞林後」「書感興詩注後」「泰軒易伝跋」「左氏蒙求跋」「難経集注跋」「唐才子伝跋」（以上、愛全二七）、「古本蒙求跋」「玉堂類稿跋」（以上、愛全二八）。

（26）（013KW1）本を（A1）、（013KW2）本を（A2）とする。このうち「王代」のところでは、（A1）は御桃園まで（～安永七・一七七八年。つぎの光格は安永八年～文化十三・一八一六年）記されており、（A2）は御桃園のつぎに今上皇帝とある。「清朝年号」のところでは、（A1）は道光（一八二一～五〇）までと、つぎの咸豊・同治との筆跡が異なっており、（A2）は道光のまえの嘉慶（一七九六～一八二〇）まで記されている。「治世年号」のところでは、（A1）は嘉永から慶応までは明らかに後から加えたものとわかり、また文政（一八一八～二九）までと天保以下との筆跡が異なっており、（A2）は文化（一八〇四～一七）まで記されている。これらから、この著述は文化元年（一八〇四）から同十三年（一八一六）の間に一応まとめられたことがわかる。

（27）『僑居日記』正月十五日条・正月十九日条・二月四日条・二月十三日条にその名が見える。元世も池田定常同様、一斎の引っ越しに協力している。

（28）公澄関連として、「奉謝　日光大王賜謁啓」（享和三年、愛全三五）がある。そのほか『僑居日記』（文化元年）二月十四日条には謁見の記事が見える。公猷関連として、「奉送　日光大王覲　京兆序」（文化十年三月、愛全七）に「黷二侍講之筵一者、有レ年二於茲一矣」の語が見える。そのほか「憶呦斎記」（文化十三年三月下旬、愛全一二）・「逍遥園詩歌巻叙」（文政九年、愛全八）・「逍遥園記」（文政十年、愛全一三）・「逍遥園歌詩巻引」（文政十二年、愛全四〇）・「静観斎記」（天保五年、愛全一三）・「棲鸞箏記」（愛全一三）・「東台准后舜仁親王和歌巻匣蓋記」（愛全一三）・「含翠軒記」（天保十一年、愛全一三）・「筆匣銘」（愛全三九）・「硯匣銘」（愛全三九）・「跋嵐渓画日光山中図」（安政三年、愛全三四）がある。公紹関連として、「堂閣選名説」（天保五年、愛全一七）・「東台新宮公紹親王和歌巻匣蓋記」（愛全一三）がある。

（29）『愛日楼全集』のなかで資愛との関係を示す文としては、「題寒江独釣図後」（文政五年、愛全二九）・「題南洞公蹟後」（弘化三年、愛全三二）がある。『佐藤一斎と其門人』一五三、三五七～三五八頁参照。

（30）一斎と山陽との交際については、『佐藤一斎と其門人』一五八～一六七頁、中村真一郎『頼山陽とその時代』（中央公論社、一九七一年）二二〇、二九七～二九八頁参照。なお『愛日楼全集』巻三〇には、山陽の『豊公論』に跋した文（天保元年）がある。

（31）『佐藤一斎と其門人』六四五頁参照。

（32）『佐藤一斎と其門人』五九六頁参照。ほかに『愛日楼全集』のなかで綱条

との関係を示す文としては、「格斎説」（愛全一七）がある。

(33) 文部省編『日本教育史資料』巻二参照。

(34) 『佐藤一斎と其門人』（四六五頁）では、伊達家所蔵本の末尾に「此編応二高遠侯索一録呈　佐藤坦」の語があることが紹介されている。

(35) 高瀬代次郎は、内藤金次郎が示した清末藩旧臣所蔵の一斎書簡によると、一斎への政治向きに関する相談、善窩記作文依頼、時器測法跋語依頼、同測法研究につき一斎が渋川某を紹介していること、一斎より『大学』板木借の申し込み、一斎への犯罪者の判決文や養子縁組に関する相談、『四書大全弁』の代価の問い合わせ、一斎より半紙十束の注文などがあったことがわかり、藩の上下と親密な関係があったと言う。また藩士渡辺東里も一斎門であり（「清末渡辺亥甫云々」天保九年、愛全五四）、家老平野一学、侍医南部順庵も一斎と親交が厚かったことを言う（五九八～六〇四頁）。『愛日楼全集』のなかで元世との関係を示す文としては、「我為我軒説」（天保四年、愛全一七）・「善窩説」（天保十三年、愛全一七）・「故毛利氏讃岐守諱元世墓誌」（弘化二年、愛全二二）・「蘿月間寄跋」（愛全三三）・「題清末侯筆蹟末」（愛全三四）がある。

(36) 『弘道館記』と一斎との関係については、拙稿「佐藤一斎と後期水戸学―『弘道館記』の成立過程―」（『日本思想史学』第二七号、一九九五年）参照。

(37) 『陽明学』第三号（二松学舎大学陽明学研究所刊、一九九一年）に樹神弘氏が紹介している。これは江戸発の佐藤信義（新蔵）宛ての書状が岩村城中で公表され、それを藩士福島茂左衛門（良直）が書き留めたものである。「この時の御老中水野越前守様なり。越前守殿躑躅之間にて仰渡せらる。松平能登守家来、佐藤新蔵厄介、佐藤捨蔵、召出され儒者を仰せ付けらる。御切米弐百俵を下せらる。この時の若年寄堀田摂津守様なり。摂津守、新部屋にて御書付御渡し。佐藤捨蔵、依田源太左衛門跡御役宅へ引越し、学問所教授勤めらるべく候。御手当十五人扶持下しおかれ、右相勤め候内は、席順大御番の上、心得らるべく候。辛丑十一月廿六日」。

(38) 以上『日本教育史資料』巻七、石川謙『日本学校史の研究』参照。

(39) 寛政四年（一七九二）九月から学問吟味が、翌年十一月からは素読吟味が始まったが、幕府儒者はその試験官を務めた。橋本昭彦『江戸幕府試験制度史の研究』（風間書房、一九九三年）参照。

(40) 寛政十一年（一七九九）から官版の刊行が始まるが、印刷は、儒者が管轄していた昌平坂学問所内の官板所で行われた。福井保『江戸幕府刊行物』（雄松堂出版、一九八五年）参照。

(41) 拙稿「検閲と幕府儒者―天保改革の文教政策―」（『歴史』第一三〇輯、二〇一八年）参照。

(42) 「幕府学問所構内総絵図」（弘化元年七月、『日本教育史資料』所収）による。

(43) 『佐藤一斎と其門人』六二四～六二五頁。一斎は天保十一年、定通の漢詩遺稿集のために「聿修館遺稿序」（愛全九）を代作している。松山藩儒との関係を示すものとしては、「熊台詩鈔叙」（文政八年、杉山熊台〈一七五五～一八二二〉、愛全八）、「鈴木君碑陰記」（文政八年、鈴木栗里〈一七八七～一八二五〉、愛全二四）がある。

(44) 『愛日楼全集』のなかで勝善との関係を示す文としては、「聿修館遺稿序」（天保十一年、愛全九）がある。『佐藤一斎と其門人』六二六～六二八頁参照。

(45) 『佐藤一斎と其門人』六三三～六三四、六三六頁参照。

(46) 『愛日楼全集』のなかで直正との関係を示す文としては、「虚受楼記」（天保十三年、愛全一四）・「呈佐嘉少将公」（弘化三年、愛全三五）がある。『佐藤一斎と其門人』六二八～六三二頁参照。また嘉永四年の項記載の拙稿参照。

(47) 弘化元年七月、オランダ軍艦が長崎に来航して開国を勧告する国王の親書を伝えた。翌年六月になって幕府はオランダ国王に返書を送り、この勧告を拒否している。ここのオランダ国への書簡とは、この返書のことである。この返書は大学頭林檉宇が作成したが、侗庵と一斎はともにそれを助けている。そのため時服を与えられたのである。

(48) 『佐藤一斎と其門人』六〇四頁参照。

(49) 『愛日楼全集』のなかで茲監との関係を示す文としては、「潜龍舎説」（弘化二年、愛全一七）・「不愧軒説」（弘化四年、愛全一七）がある。『佐藤一斎と其門人』六三三、六三六～六三七頁参照。

(50) 『愛日楼全集』のなかで宗城との関係を示す文としては、「宇和嶋侯書画錦堂記跋」（弘化元年、愛全三二）・「九思書院記」（嘉永四年、愛全一四）がある。『佐藤一斎と其門人』六三七～六三九頁参照。また嘉永四年の項記載の拙稿参照。

(51) 『佐藤一斎と其門人』六四〇～六四三頁参照。

(52) 筒井政憲は弘化二年七月から嘉永七年七月まで学問所御用掛であり、林復斎も天保九年から嘉永六年に大学頭になるまで同掛であった。

(53) 古賀茶渓（一八一六～八四、在任一八四七～五五）は侗庵を継いで弘化

四年三月から、安積艮斎（一七九一～六〇、在任一八五〇～六〇）は嘉永三年三月から、それぞれ幕府儒者となっている。

（54）松崎純倹（？～一八五四、在任一八四三～五四、通称は満太郎、号は柳浪）は林述斎の門下であり、天保十四年九月に幕府儒者となっている。

（55）林晃（在任一八五三～五四、号は鴬渓）は林復斎の子で、嘉永六年六月に幕府儒者となっている。

（56）『愛日楼全集』のなかで高猷との関係を示す文としては、「刻資治通鑑跋」（嘉永二年、愛全三三）がある。また嘉永四年の項記載の拙稿参照。

（57）木村裕堂（？～一八五九、在任一八五五～五九）は安政二年九月に幕府儒者となっている。